

[演題名、筆頭演者氏名、共著者氏名、所属機関名]

セルフネグレクトや引きこもりが社会問題化した時代に求められる医師アウトリーチの枠組み  
～医療関連困難事例に医師がコミットする意義～

○星野大和

松戸市医師会

[抄録本文]

松戸市医師会は、平成 28 年度から在宅医療・介護連携推進事業を松戸市から受託し、そのうち  
オ)在宅医療・介護連携に関する相談支援として、地域包括支援センター(以下、包括)だけでは  
対応が困難な事案に医師アウトリーチを実施している。

訪問診療の経験のある医師会員を包括ごとにサポート医(以下、SD)として配置し、SD が包括か  
らの相談に必要なに応じてアウトリーチ(以下、OR)を行う。また調整機能を松戸市在宅医療・介護  
連携支援センターが担い、事例の整理や緊急度の判定、ORにおけるSDの同行、OR後の包括  
の支援を行う。

ORの主な対象は医療関連困難事例であり、医療機関受診や介護保険の利用を拒否している事  
例、がんや内臓疾患など医療対応が必要だが福祉介護職では適切な初期対応に結びつけるこ  
とが難しい事例、精神疾患やアルコール関連の問題を抱えている事例、虐待やセルフネグレクト  
が疑われる事例、どの医療機関や診療科に診療を依頼するべきかわからない事例などである。S  
Dは、大まかな診立てや今後予想される臨床経過を助言し、解決への道筋をつける。平成 30-31  
年度ではOR後に 84%の事例が、医療に適切につながっている。

平成 28 年度は相談件数 103 件/OR8 件であったが、平成 31 年度には 421 件/48 件と増加した。  
精神科や小児科領域も関係する事例が増えたため、SDがコンサルトできる枠組みとして、専門  
サポート医を平成 31 年度から創設し 9 件の依頼があった。コロナ禍の令和 2 年度は 241 件/35  
件と減少したが、専門サポート医依頼 10 件、搬送搬送事例 8 件、依頼時点では把握されていな  
かったがORで問題を抱える子を覚知した事例 6 件といずれも増えている。また弁護士と協働して  
対応した事例も 4 件あった。より複雑・困難な事例に対応するため、経験を蓄積し多機関間のネッ  
トワーク構築や柔軟に相談できる関係性の強化を図るとともに、精神科医や弁護士と協働するO  
Rを展開していく。

(COI:なし)